



介護認知症の着段普

「最期まで自分らしく生きる」とは、どういうことでしょうか。認知症が進行すると、できなくなるが増え、自分らしく生きることが難しくなっていくます。介護職は、本人の過去・現在・未来の話に耳を傾け、それを踏まえて「どんな生活を送りたいか」を一緒に描き、ゴールに向けて伴走し続けます。

昨半夏に八十五歳で亡くなった神田さん(仮名・女性)は、最後の約一年間、毎日のようにユアハウスに通っていました。

専業主婦の神田さんは、東京の渋谷や原宿で洋服を買ったり、自分で描いた絵を服に転写したりと、とてもオシャレな方。料理が得意で、ユアハウスでの昼食作りでも積極的に食材を切ったり、ギョーザを包んだりしてくれました。

しかし、レピー小体型認知症の進行に伴い、体が思うように動けなくなり、意識疎通を図るのも難しくなっていました。突然、電車が見えるといった幻視も増えていきました。

それでもユアハウスのスタッフと服を買いに行った

伴走 言葉聞き続け

り、行きつけの美容室で髪を切ってもらったりと、以前のような生活を続けることを目指しました。美容室ではゼリーで水分補給。ユアハウスで髪を染めたこともありました。

料理の際は座っていると体が傾くため、立って調理する神田さんをスタッフが支えました。買い物するときにはスタッフが商品を二つ手に取り、神田さんにうなずいてもらったり、表情を見たりして、時間をかけてお気に入りを選びました。

しかし病気は進み、のみ込む力が衰えて食事が取れなくなった神田さんは、医師から終末期と宣告を受けました。そのころからユアハウスに連泊。私が夜勤の夜は二時間ほど、真剣に語り合ったこともあり。神田さんの声は小さくかすれていましたが、私は一言も聞き漏らさないように集中しました。

内容はご家族の話ばかりでした。当時、ご家族は毎日のように面会に訪れ、そのたびに神田さんは満面の笑みを浮かべていました。息子さん夫婦やお孫さんといった「家族みんなで仲良く暮らしたい。一緒にご飯を食べたい」と神田さん。何よりお孫さんの将来を気にかけていました。

亡くなるその日も神田さんは、服のコーディネートを自ら考えました。つらそうだったので「お部屋でお休みになりますか？」と尋ねても、首を振って「みんなと一緒にいたい」と、個室ではなくリビングルームに来て、周りの利用者さんやスタッフに笑顔を見せてくれました。

しかし昼ごろに容体が急変し、救急搬送されて病院に。数時間後、大好きなご家族が奇跡的に全員集まった後、神田さんは息を引き取りました。一日でも遅かったら、お孫さんが駆けつけられなかったとのこと。だから神田さんは、その日を選んでほしくないかと私は思いました。

いつがお別れの日になるか、私たちには分かりませんが、利用者さんの一つ一つの言葉をその日まで、大切に聞き続けたいです。

(森近恵梨子 介護士・二十五歳)

◇ 小規模多機能型居宅介護事業所「ユアハウス弥生」(東京都文京区)のスタッフが、介護の実践を報告する。

次回は三月二十九日掲載



ユアハウスでのお誕生会で笑顔を見せる神田さん＝東京都文京区で